

水木しげる氏

表紙絵

=父さん、明日の予定はどうしましょう？=

表紙絵：水木しげる

- | | |
|-----------------------|-----|
| ・ 特集：私のすすめるこの一冊 | 2～7 |
| ・ 第1回YA講演会 | 8 |
| ・ イベントスケジュール | 9 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | 10 |

※音声版、マルチメディアDAISY版もあります。ご希望の方は図書館へお問合せください。

私のすすめるこの一冊

皆さんからお寄せいただいた「私のすすめるこの一冊」です
今年はどんな本と出会えるでしょうか

★マークは、紹介者がこの一冊をどのような本として紹介したいかを示したものです

『長州奇兵隊―勝者のなかの敗者たち―』

推薦者：^{かみえゆうや}上江結弥

一坂太郎／著 中央公論新社 ★おもしろかった本

今日語られている明治維新の歴史は、美化された英雄譚となっていないか。この本は、そんな危機感を抱いた著者が、豊富な資料や貴重な証言を元に、明治維新の「実際」に迫る作品である。本の中で描かれる当時の人々の姿からは、歴史の教科書を流し読みしただけでは到底感じられないようなリアルな息遣いが聞こえてくるようだ。改革とは、痛みを伴うものである。この本に描かれる明治維新は、百五十年以上の時を超えて尚色褪せない強い教訓を与えてくれる。

『大本営参謀の情報戦記―情報なき国家の悲劇―』

推薦者：リオリコグランデ（ペンネーム）

堀栄三／著 文藝春秋 ★社会の指導層向け必読書

この本は第二次世界大戦中に大本営の情報参謀として活躍した著者の体験をもとに精神論や希望的観測に頼り正確な情報収集と分析を軽視した当時の日本軍の構造的欠陥を指摘している。更に、国や企業の生存のためには、情報を収集し、冷静で的確な判断が必須であると強調し、情報軽視に陥り易い日本型組織の欠陥をも指摘している。現代の企業や社会にも通じる教訓に溢れた名著として高い評価を得ているのも頷ける。

『エミール 1～3巻』

推薦者：^{おのがみしゅんいちろう}尾上竣一郎（ペンネーム）

ルソー／著 光文社 ★高校生にすすめたい

著者のルソー（1712～1778）は、本書（1762年出版）で人権が王権などによって圧迫されていた18世紀の社会で、どうすれば1人の人間が自由・独立な個人となるかを説いている。教育面では、現代のアクティブ・ラーニングに似た形で、教師は学びが自主的・主体的に展開するよう、学習環境を整えるように勧告している。

訳文は、高校生に読み易い平易な文である。今後本格的に人間形成・自己形成に取り組む高校生に一読を推奨したい。

『小さな魚―モンテ・カッシノの陥落―新版』

推薦者：^{いのうえあきこ}井上暁子

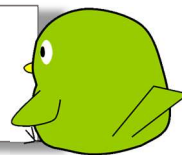
エリック・C.ホガード／作 富山房企画 ★おもしろかった本

初めてこの本に出会ったのは20年程前だろうか。『小さな魚』というタイトルにひかれた。小さな魚？何だろう？1943年ナポリからカッシノまで移動した戦争孤児グイドの物語である。生きていくためには嘘をついたり盗みをしたりもする。しかし、人間らしさを失わず、周りの人間を冷静に見つめ、どんな人であれ同じ人間なのだという考えを持ち続けているグイドの姿勢に心を打たれる。世界中の小さな魚たちに幸あれ。待望の復刊が嬉しい。

『この村にとどまる』

推薦者：原田純子 はらだじゅんこ

マルコ・バルツァーノ／著 新潮社 ★感動した本



北イタリアだがドイツ語圏であるクロン村に暮らす女性トリーナの半生の物語。ファシズムが台頭しはじめた頃、クロン村にはダム建設計画の噂が流れていたが村人たちは気にしなかった。トリーナは“言葉”こそ自分を救ってくれる大切なものと信じ、教師を目指してイタリア語も勉強した。やがて結婚し娘と息子を持つが、娘とは離別、息子はナチに傾倒し夫は出征拒否で山奥に逃避した。

戦後再度ダム建設の話が出て、トリーナは語学を生かし村の存続を訴え新聞社、司教、村々の長に手紙を書いた。夫はローマ教皇にも謁見した。ダムに沈むかもしれない村を、トリーナが信じた“言葉”で救うことができるだろうか。

『博士の愛した数式』

推薦者：荒井宏祐 あらいひろすけ

小川洋子／著 新潮社 ★感動した本

もしあなたが18歳でシングルマザーとなり10歳の男の子を抱えていたら、もしあなたが記憶が80分しか続かない老数学者だったら、どう生きていくか？この小説は、そうした3人が互いにケアし、ケアされる物語である。

この孤独な3人を側面から支えるのが阪神タイガースの活躍や江夏投手の背番号28が28以外の約数を足すと28になる完全数であるなどの数学の楽しさである。

上記の著者は、自分が小説を書くのは悲しみを受け入れる人に寄り添い見守るためだと、あるエッセイの中で述べている。この作品こそ、この創作意欲が最も生々と表現された感動的な名作である。

『もうすぐおしょうがつ』

推薦者：電車っ子 Party（ペンネーム）

西村繁男／さく 福音館書店 ★何度も読み返した本

犬の家族が祖父母の家にてお正月を迎える絵本です。著者が高知県出身だからか、おじいちゃんおばあちゃんの言葉が方言があり、こんなアクセントかなと思いながら、子どもに読み聞かせています。障子をはがしたり、はたきで掃除をしたり、庭で餅つきをしたり。

筆者である西村さんは相模原で「どんぐり文庫」という名前で地域の方向けに絵本の貸し出し、風揚げ、団子づくり、木工細工のワークショップを定期的に行っています。西村さんに直接お会いすると、西村さんの生活の中で体験したことが絵本に描かれているのかなと、思える方です。

『佐久間宣行のずるい仕事術—僕はこうして会社で消耗せずにやり たいことをやってきた—』

推薦者：上江博幸 かみえひろゆき

佐久間宣行／著 ダイヤモンド社 ★おもしろかった本



仕事でも日常生活でも、他者との競争を意識するのではなく、独自の視点を尊重した実践を「ずるい」と表現する人生の指南書的な本である。著者はテレビプロデューサーだが、それゆえに表現力は秀逸で、各項を端的に示す見出し、簡潔にまとめた表現は、まさに「ずるい」を実践しているといえる。

ビジネス書の体裁ではあるが、その本質は生き方を見つめなおし、日々の考え方を改めてみる一歩につながる内容である。ぜひお手に取っていただきたい1冊である。



『ザリガニの鳴くところ』

推薦者：2D（ペンネーム）

ディーリア・オーエンズ／著 早川書房 ★おもしろかった本

2021 年本屋大賞翻訳小説部門第 1 位の本作は、戦後アメリカ南部のノースカロライナ州の湿地帯が舞台のミステリー小説です。しかし読後の感想としては、安易にミステリーとカテゴライズしていいのか？と思うほど、様々な要素が含まれています。戦後のホワイトアウトや黒人差別、貧困の問題にも触れながら、湿地帯やそこに生息する生物の描写も丁寧に書かれています。殺人の容疑者になった主人公の「カイア」の半生を辿りながら、事件の真相が明らかになる終盤、あまりの衝撃で読後も長い間余韻に浸りました。

『星のまつり』

推薦者：^{ながおとしひろ}長尾敏博

最上一平／文 童心社 ★おもしろかった本

久しぶりに童話を表題に魅かれ読んでみた。東北の星のきれいな町の集落、ほたる沢に住む小学 4 年生の美紀は、従妹で同学年のかりんを母親の入院で、夏休みに家で預かることになった。美紀は、自分より勉強が出来る彼女が苦手、「ほたる沢には盆踊りがなくてつまらない」と言われたことを契機に青年団に提案、「星のまつり」とする。その目玉に劇を奨められ、親友の京子と台本作りを始め、かりんも参加させようとするが…。当初頼りない青年団が笑わせる。郷愁を誘う楽しい作品。掘り出しものを見つけた気分になった。

『新世界の天使』

推薦者：^{いしかわみのる}石川 実

宮内董次／著 Independently published ほか ★感動した本

55 年前、小学校 5 年生の時、図書館で『新世界の天使』に出会いました。新聞書評には「童話風だが大人の童話」とありました。天使と青年との対話には「人間にとって一番大切なこと」を考えさせる深い示唆があり、私は人生の歩みの中で、折に触れてこの本に思いを重ねてきました。読み返すたびに新しい感動を与えてくれる一冊です。

『朝と夕』

推薦者：^{かみえさとこ}上江聡子

ヨン・フォッセ／著 国書刊行会 ★感動した本

ヨハネスが生まれた日を描く「誕生」と、他界の日を描く「死」、2 章だけの物語。「誕生」では息子の誕生に喜びと不安が交錯する胸中を父オーライが吐露し、「死」では旅立ちつつあるヨハネスの意識が過去と現在・此岸と彼岸を行き来する。あれほど息子の誕生を待ちわびた父のことを「反りが合わなかった」と思い返す場面をはじめ、静かな諦念の中で終わってゆく誕生と死の間の日々が、その二日間の描写に透けて見える。特別なことは何も起こらない。だからこそ、読後涙が止まらない。

『和菓子のアン』

推薦者：なないろ文庫（ペンネーム）

坂木司／著 光文社 ★世界が広がる本

高校卒業後に進学も就職もしなかった主人公アンちゃんが、デパ地下の和菓子屋「みつ屋」でアルバイトを始めたところから広がる物語。将来進む道に迷っているアンちゃんが仲間と一緒に成長していく姿には、きっとたくさん共感できる場所があり、応援したくなるはずです。アルバイトの接客では、和菓子に込められた意味や文化をもとに、お客様の気持ちを推理するミステリーの要素もあり、読み手の私達も一緒に和菓子の由来や日本の歴史を学ぶことができますよ♪

『エリート』

推薦者：かみえあきほ 上江明穂

三月みどり／著 KADOKAWA ★おもしろかった本



幼少期、天才子役と呼ばれた主人公、綾瀬咲。小さい頃からママの言うことをよく聞き、ママのために人生をかけていた…。しかし中1になりドラマへのオファーはほぼ0に。天才子役が凡人へと変化した瞬間だった。大好きなママにも「役者には向いていない」と見捨てられそうになる。この後咲はどうなるのかそれは読んで確かめてください。この『エリート』という本で1番好きなシーンは咲が役者ではなく「優等生」を目指すシーンです。目標が変わっても真っすぐつき進む咲の姿は本当にかっこよかったです。この本には想像もしていなかった展開やおどろきのラブコメディなど様々な事がらがぎゅっとつまっているのぜひ読んでみてください。

『世界終末戦争』

推薦者：夢一輪（ペンネーム）

マリオ・バルガス＝リョサ／著 新潮社

★戦後80年という節目に考えたい戦争のことを著した本

戦争というものの実態を余すところなく書き連ねた大作にして、ノーベル文学賞受賞作。ブラジルの、文明から取り残された辺境の地に現われた、キリスト教の布教をする男と膨れあがった信者達に対して、出来上がったばかりの共和国政権は、反対勢力の王党派との繋がりを疑い、弾圧からやがて戦争勃発へと進む（カヌードスの反乱）を描いた物語。戦争の渦中にある人間の本质を炙り出し、どこまでも醜悪な姿を暴く。無益な戦いによって失われていく生命。その様は、今世界で起っている事と何ら変わらない。世界が捻れ、頭脳と違う方向に足が向きつつある今、人間の心を鬼畜に変貌させる戦争について、読んで深く考えるしるべとなった一冊だったと思う。

『図書館の神様』

推薦者：なえ（ペンネーム）

瀬尾まいこ／著 筑摩書房 ★何度も読み返した本

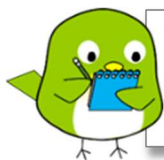
主人公が高校の先生として働くお話ですが、テレビドラマで見ると、自分が過ごしてきた高校生活のようなものとは少し違って、先生ってやる気に満ち溢れた人ばかりではないんだな、文芸部って物静かな子だけの部活ではないんだなって思ったことをよく覚えています。たった一人の文芸部員の垣内君と主人公の清とのやりとりが好きで、高校生のときに初めて読んでから人生の節目節目に読んでいます。本を読むことっていいな、先生って悪い仕事ではないかもなと思わせてくれる思い出の一冊です。

『いっしょに翻訳してみない？—日本語と英語の力が両方のびる5日間講義—』

推薦者：のぶくにけんじ 信國謙司

越前敏弥／著 河出書房新社 ★おもしろかった本

「ダ・ヴィンチ・コード」や「ロンドン・アイの謎」の翻訳で知られる著者が中高生を対象に、AI（人工知能）には真似できない英語の作品の読み取り方、日本語ならではの表現方法のツボをオー・ヘンリーの「二十年後」を題材に教えてくれる本。大人にも十分楽しめます。原著が英語の小説やビジネス書、技術書などの日本語訳がたくさん出版されていますが、読みにくいものが多いのも確か。翻訳者の技量や姿勢の問題もあるのだと分かりました。中学生か高校生の時に会いたかった面白くて、ためになる本です。



『祖母姫、ロンドンへ行く！』

推薦者：こつかけいこ小塚恵子

榎野道流／著 小学館 ★おもしろかった本

ユーモアのある筆致で、お姫様のように振る舞う 80 歳を過ぎたお婆様と孫娘が、イギリスを旅したときのエッセイです。筆者は、人生を重ねてきた祖母から、またホスピタリティー溢れるホテルや美術館のスタッフの対応から、色々なことを学び成長をとげていきます。笑いと涙で、ホッコリできる 1 冊です。これを読んだら、誰か家族と旅を試してみたいくなるかも。楽をせず、努力し、その結果自信を持つことで、最高の自分でいられる等、自己肯定感の大切さを語る「姫」の言葉も心に残ります。

『変な家』

推薦者：かみえともき上江智希

雨穴／著 飛鳥新社 ★おもしろかった本

数年前、日本を恐怖の渦へと陥れた 1 枚の間取り図。それは本当ならば新生活を彩るはずだったもの。あれ、この空間って…？その一言からすべての歯車が狂い始める。いつもなら気にしなかったであろうところまで全てが気になってしまう。誰が何の為にどうやって建てたのか。かつての真相が分からないまま想像だけがどんどん広がっていつてしまう。その空間、その間取り、その家の目的とは…。読み終わった後にぜひ、自分の家をぐるっと一周眺めてみて下さい。え、その空間って…。

『嵐吹く時も』

推薦者：たなかしょうじ田中昌司

三浦綾子／著 新潮社 ★感動した本

荒れ狂う時代に打ち碎かれながらも、なお人を信じ、希望を失わずに歩み続けた人々の感動的な物語です。人生には、迷いや過ち、後悔がつきものです。私たちは学びながら成長していきますが、それは同時に、失敗を重ねることでもあります。だからこそ、その歩みの中で、お金や地位に代わる、かけがえのない何かを見つけることができたなら、その宝を胸に抱いて生きていくこと——それ以上に大切なことは、もしかすると他にないのかもしれない。この物語が、あなたの人生にそっと問いを投げかけ、心の奥に残る光となりますように。

『大人の見識』

推薦者：おぎわらたつよし荻原達義

阿川弘之／著 新潮社 ★何度も読み返した本



“すぐれた意見”とされる見識も、大人の見識となると難しい。本書は安普請ではなく、大人の見識で小説・評論など 60 年にわたって発表してきた阿川氏が、言論弾圧に苦しんだ第二次大戦中の日本人を中心に、世界中の人々の見識を集めたもの。国家非常時に直面した際の見識は印象深い。歴史に学べとよく言われるが、激動の時代の今こそ大人の見識を持った政治家をじっくり見きわめて選びたいものである。

『思い出株式会社』

推薦者：にしだゆうこ西田裕子

土屋嘉男／著 清水書院 ★何度も読み返した本

黒澤明監督の映画に出演されていた俳優の土屋嘉男さんが、子ども時代からの思い出を綴った本。抱腹絶倒なエピソードも満載です。今は失われてしまった懐かしく豊かな日本の情景が、土屋嘉男さんの「思い出」の中に詰まっています。何度読んでも楽しく幸せな気持ちになります。続編もおすすめです。

『老人初心者のたくらみ』

推奨者：^{にったみち}新田美智

阿川佐和子／著 中央公論新社 ★おもしろかった本



タイトルに惹かれ手に取り、以前にもこの著者の作品は心地よく読み進められるので、何冊かは読んでいた。いつも感じる事ではあるが、表現が簡潔で小気味良い。一章が数ページずつなので、読んでいて苦にならない。書かれている事柄は日常茶飯事に起こりうる。又読者も何かしら経験する事、した事があり、なるほどと思いたくなります。全般的にポジティブで、物事に決して、クヨクヨしていない。この本を読んでいるうちに、年を重ねる事は楽しい事なのかもと、思わせてくれる一冊でした。

『蓮と刀―男はどうして“男”をこわがるのか?―』

推奨者：まどのうめ（ペンネーム）

橋本治／著 河出書房新社 ★何度も読み返した本

「LGBTQ」という概念すらなかった1982年に出版されたこの本は、40年以上の時を経てもなお「生きづらさ」を自覚する人間にとって強く響く「救いの書」である。

現代日本という「特殊な社会」の中で生きるとはどういうことなのか。男とは。女とは。ジェンダーとは。セクシュアリティとは。その答えは、貴方が自分の頭で考え続けるのですよ?と、ひたすら語りかける本書。

私の人生を変えた一冊。

『静かな退職という働き方』

推奨者：FIREに失敗した男（ペンネーム）

海老原嗣生／著 PHP 研究所 ★必読書

日本でなぜ働き方改革が進まないのか、その実現のために何が不足しているのかがよくわかる本。人手不足の時代において、定年延長で再雇用が常態化する今後、管理職になること自体が人材としての市場価値を下げることになるので、「静かな退職」がベストとわかる。しかも、管理職を放棄することで得られる機会費用の補填方法まで言及されている。口先だけでなく、真摯に働き方改革をする気がある経営陣の必読書。というより、この本を読まずに働き方改革などと口走る人など信用できない。

『君を守ろうとする猫の話』

推奨者：Main（ペンネーム）

夏川草介／著 小学館 ★何度も読み返した本

『お前なら、きっと本を取り戻せるはずだ』

なぜ本を燃やすんですか？

「一番怖いのは、心を失うことじゃない。失った時に、誰もそれを教えてくれないこと。誰かを蹴落としたときに、それはダメだと教えてくれる友達がいないこと。つまりひとりぼっちだってこと」

図書館で、最近本がなくなっているらしい。館内の探索を始めたナナミは、青白く輝いている書棚の前で、翡翠色の目をした猫と出会う。

今まで読んだ本の中で最高の小説、読みやすい文章と一人の少女が本を守るために戦う物語。

たくさんのご応募ありがとうございました。
お寄せいただいた原稿は、掲載の都合により一部編集させていただきました。
掲載は順不同になっております。ご了承ください。



今からだ！

- 10代のみなさんに小説をとおして伝えたいこと -



令和7年9月20日（土）、作家の汐見夏衛さんをお招きして、中高生世代向けの講演会を行いました。講演の一部をご紹介します。

●子ども時代～作家になるまで

子どもの頃から、本を読むのが大好きでした。ただ、憧れはあったけれど、最初から作家を目指していたわけではありません。

大学卒業後は、自分と同じように他の人にも本が好きになってもらいたいという思いから国語教師になりました。働き始めて数年後、友達から作家デビューすることになったという連絡が来て、大きな転機を迎えます。携帯小説サイトで書いていたと聞いて、自分も書いてみたいと思って小説を投稿するようになると、本当に楽しくて新しい趣味になりました。

小説を投稿して、自分が好きだと思える小説を書けることが幸せだなと思っていたある時、出版社の方から「書籍化しませんか？」と連絡が来てデビューすることになりました。



●作品を通じて届けたい思い

中高生世代の子たちが、生きづらいな、生きるのがしんどいなと思った時に、ちょっと元気になれる、明日も頑張れるようなお話を書きたいという思いがあります。小説の主人公が持っている悩みや問題と同じような気持ちを抱える子たちが、小説を通じて問題の捉え方や解決のヒントを得られるようなお話になればいいなと思って書いています。自分自身、10代の時に色々な悩みを抱えていました。そんなときに小

説やマンガの主人公をみて、その子の変化や成長を通じて自分も成長した気になることや、自分の悩みを言語化してもらえて気持ちを昇華できることがありました。だから、次は自分が若い子の気持ちに寄り添えるお話を書きたいと思っています。

作家としての生活や作品についてなど、参加者から寄せられた多くの質問に丁寧に答えていただきました。講演後のサイン会では、参加者のみなさんが、緊張しながらも憧れの作家さんとの交流を楽しんでいる様子が印象的でした。

汐見夏衛（しおみなつえ）氏

国語教師を経て、2016年に『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』（スターツ出版）で作家デビュー。『夜が明けたら、いちばんに君に会いにいく』が「野いちご大賞」大賞を受賞。どちらも2023年に映画化。中高生世代を中心に広く支持される著作を多数執筆。



イベントスケジュール



1月から3月までの図書館の行事予定です。詳しくは、図書館ホームページ
または館内のポスター、市報等をご確認ください。

1月	2月	2月
11月19日(水) ～1月25日(日) 本のおみくじ 若葉分館	3日(火) 樟まつり講演会「江戸から見直す民主主義」関良基氏 たづくり12階大会議場 14時～16時	21日(土)～3月1日(日) 映画のまち調布シネマフェスティバル2026 「出張！映画資料室－ロケ地でめぐる調布－」 たづくり2階南ギャラリー 9時～19時
4日(日)から2月11日(水) 新春シールあつめ 宮の下分館	3日(火)～7日(土) 樟まつり調布淡彩画展 中川平一氏指導 「調布淡彩画の会」作品発表 たづくり2階南ギャラリー 10時～17時(初日12時～、最終日16時終了)	24日(火) 樟まつり講演会「私の好きな詩－作品から詩の世界を考える－」宮本苑生氏 たづくり12階大会議場 14時～16時
14日(水) 1月の読書会『ビルマの豎琴』 竹山道雄著 たづくり6階601会議室 14時～16時	9日(月) 樟まつり講演会「小説×科学－私の創作活動－」伊与原新氏 たづくり8階映像シアター 14時～16時	26日(木) 樟まつり講演会「感情的な日本語」加賀野井秀一氏 たづくり12階大会議場 14時～16時
17日(土) 宮の下分館整備事業説明会 西部地域福祉センター 大集会室 14時～	12日(木) 樟まつり短歌大会 たづくり8階映像シアター 13時30分～16時	
21日(水) トークイベント ※受付終了 「読むこと、書くことのよこび」辻村深月氏 たづくり くすのきホール 16時～18時	19日(木) 樟まつり俳句大会 たづくり8階映像シアター 13時30分～16時	
		3月
		7日(土) 3月の読書会「テーマ未定」 たづくり6階601会議室 10時～12時
		25日(水) 図書館だより春号発行

古風な農村の結婚習俗

関口 宣明のぶあき

結婚—それは人の一生の大きな節目であり、かつての農村では、家と家とを結ぶ重要な儀式でした。縁談は家長を中心に取り仕切られ、家どうしや地域のしきたりが結婚のありかたを決めていました。その具体例として、大正初期まで、調布でも行われていた「アシイレ(足入れ)」があげられます。それは名前のとおり、花嫁が初めてむこ婿の家の敷居をまたぐことをさし、形式的な披露宴に先立つ大切な儀式でした。

1. 結婚と家のつながりを支えたアシイレ

アシイレは結納ゆいのう(婚約のあかしとして金品を取り交わす儀式)がすむと、正式なお披露目よりもかなり前に、嫁となる娘が仲人とともに婿の家に樽酒を持って行き、娘が一時的に泊まる結婚の形式です。これがすむと結婚が破談になることはほぼなくなり、両家の往来は自由になりました。そのため、田畑をもって人手のほしい農家にとっては都合のよい方法でした。

当時は同じ村や近隣地区との結婚が多く、相手方の経済状況や家族の様子もよくわかっていました。こうした状況から、嫁入り支度が整わないうちに婿方で早く嫁を迎えたい場合、祝儀・披露宴を省略して、ごく内輪のさかずきごと盃事ですませることもありました。

2. 調布に残るアシイレの記録

旧深大寺、入間、下石原などの各地区では、このアシイレが行われていました。結納がすみ、式まで数ヶ月を残したころ、吉日を選んで嫁と嫁方の仲人が婿の家を訪ね、簡単な盃事をします。そして嫁は一日から数日婿家に泊まり、帰りには婿方の仲人が嫁の家まで送り届けました。

婚礼の時期についても吉凶を判断して、節分を過ぎて年が変わるまで式を延ばしたりしました。旧下仙川村には、アシイレの記載がある明治から大正初期にかけての記録が残っています。それによると、明治35(1902)年には、婿が25才の厄年やくどしを迎えるのを避けて、節分前の1月末

に、以前からの親類がいる隣村のきゅうでん給田から嫁がアシイレし、農繁期の始まる前の4月に本式をあげたとあります。

3. アシイレ婚から嫁入り婚へ

アシイレは古くからの「つまどい婚」(夫が妻の家を訪れるだけで同居しない結婚様式)の影響を受けた形と考えられており、夫婦は当初別々に暮らし、地域によって妻が夫の家に通う場合と、夫が妻の家に通う場合の二つの方式があったと推定されています。調布のように妻が夫の家に通う場合は、嫁は婚礼直後にしゅうと姑と同居し、「サイフワタシ」などといわれるように、一定の時期をへて、嫁の性質や才能をみてから家政をまかされる家族制度と結びついた仕組みでした。アシイレの風習は、家格を重んじ女性のはたらきを低く見る武家の嫁入り婚が広まると次第に姿を消し、現在のような嫁が婿の家に入る結婚が主流となりました。

結婚の慣習には、時代ごとにその暮らし方や価値観に適した形がありました。調布に残された伝承をたどることは、結婚の歴史を通して「人と人がどう結びついて生きてきたのか」を考えるうえで、今なお意味深いことといえるでしょう。

※参考文献：『調布市史 民俗編』調布市

『広辞苑』岩波書店



農家に嫁ぐ花嫁

刊行物番号

2025-140

図書館だより 第277号

令和 7年12月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<https://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>

調布市立図書館公式X

図書館のイベント情報
などを発信しています。

